

# Salty Waters

芝田勝茂 さしだかつしげ



熱い。熱いかたまりがぼくの体の中にある。溶鉱炉の中のマグマみたいな灼熱のかたまり。それがぼくのおなかのなかにある。はじめはかすかにチリチリ痛むだけだった。砂の粒とか、七味に入っている麻の実ほどもない大きさ。でもそれはたしかに存在していて、ここにいるんだぞ、と主張していた。線香花火をすると、はじけて散ったいちばん最後に夏の記憶をぜんぶまとめた赤いかたまりが墜ちていくだろ、あれ。最初あれくらいのものが、おなかの奥のほうにあった。そして次第に大きくなって、いまではちょっとした小石くらいの大きさになっている。

ぼくの中から、いろんな病気を経験してきたから、肺炎をやったときとか、胃や腸に穴が開いたときの痛さは、少しずつがっちはいるが、それに似た最初の痛みの感覚だった。だからこんどはどこだろう、いよいよだろうか、などと考えているうち毎日意識せざるをえないほど大きくなってきて、またしても見慣れた灰色の門をくぐるようになってしまった。でもまだ、ここから別の病院に移るよりはましだ。ミヤはここからもっと大きな病院へつれて行かれ、あとで短い知らせだけが届いた。そんなふうには病院を移って亡くなったひととはみんな明らかな病名がついていて、死因はその病気のせい、それ以外のなものでもなかった。だけどぼくは知っている、それはみんなジコのせいなのだ。ほんとはジコではなくてバクハツだったが、そういって